

平成30年度 きのさき見て歩き 第2回

実施日 平成30年9月14日(金) 9:30~12:00

講師 坂田 文一郎 氏(城崎文化協会会長)

<桃島宝篋印塔・藤金吾墓石>



左：桃島宝篋印塔 昭和53年城崎町指定文化財
(現在豊岡市指定文化財)

宝篋院陀羅尼を納める塔、後に供養塔、墓碑塔として建てられた。この塔は銘文から応安5年(1372年)に建立されたもの、石材は伊根石と判断されている。どうして桃島に建てられたのか、誰が祀られているのかは不明。

左から二つ目：藤金吾墓石(大正7年没・墓石は没後50周年に教え子たちが建立)

藤金吾は元小倉藩士。晩年桃島「円通庵」で寺子屋風の私塾を開き、地域の青年に漢学、英語、哲学、珠算などを教えていた。

<子ども広場跡>



桃島宝篋印塔はもとはここに建てられていた。

桃島から参加されている方から、「昔はここで野球をした」「後ろにある金網がバックネットがわりだった」などと子ども時代を懐かしむ話が次々にでた。参加者が立っているところの道も広場で、大きな桜の木もあったそうだ。

<桃島神社参道・宝珠と笠と火袋の欠けた御神燈籠>



「施主 若連中 明治十拾九月吉祥」の銘記あり。

明治9年に佩刀禁止令がでたり、10年には西南の役が起こったりと、封建色が払拭されていく時代の中で氏神祭礼が古道神道の強調で盛んになり、神社等への寄進が行われるようになった。この御神燈籠も当時の社会の一端を映しているのでは。

<桃島神社参道・神社名標柱>



「式内 桃島神社」「結城 琢 明治三十五年四月建立」の文字が彫刻されている。

この石碑から、桃島神社が、平安時代、延喜式「神名帳」に記載されている神社であり、千年以上の歴史をもつ古社であることがわかる。

結城 琢 は大和屋勘右衛門の長子として明治元年に生まれる。号は「蓄堂」。郷土の漢詩人三宅竹隠に学ぶ。台湾・樺太の地誌や日露戦争史の編集に携わる。東京で新聞記者をし、晩年は詩文に専念。機関紙「詩林」を創刊する。大正 13 年没。この碑は 35 歳の筆跡。

<桃島神社参道・板橋>



桃島神社参道口から参道に至る風景（左写真）は、昔も今もほとんど変わらない。しかし、桃島神社社殿内にある寄付木札（明治 12 年 9 月）によると、板橋が寄進建立された記録が残っている。安政 6 年の地図では桃島峠から村中を通り桃山川を横断して桃島神社に至る一本の道があることから、山陰線敷設前は村中から橋を渡って参道に至ったことがわかる。明治 42 年に山陰線が城崎まで敷設され、その後の山陰線延伸工事で川筋が変更になり板橋も不要になった。



参道口背面の桃島川沿いを山陰線が通っている。この山陰線を敷設するために川の位置が変えられ地形が変わってきた。土を盛っても、盛っても、沈んでしまうので山陰線敷設の三難所の一つと言われたそうだ。

<村中>



山陰線高架下を抜けて村中に入る。

村中を流れる水路（写真下）には、石の階段があり、ここから舟に乗り降りしたことがわかる。かつてはここまで桃島池があった。

桃島地区は水の豊かな地区で、湧き水も多く、飲料水には困らなかった。一方湯島は温泉は出るが、飲むことができず飲料水には困っていたという。

桃島地区は池があり、田畑があり、円山川の下流域にあることから半農半漁で水にも恵まれ城崎の食糧を支えていた。



<桃島峠>



桃島から湯島に通じる桃島峠。安政 6 年の地図では、道はあるが峠の名前はない。明治 43 年の地図には、桃島道の名前がある。

今の道は、山を切り崩してできたもので、右側に見える住家の上部に庵跡の石碑が残り、その庵跡の前に元の峠道があったと聞く。